

燃えつきぬ根来衆の心

—紀州の大激戦—

44期生

I テーマ設定の理由

和歌山県にそびえ立つ根来寺、今は静かな静かな地であるが、昔、大激戦がくり広げられた土地だったという。一体大激戦とは何か？といくら考えた所で頭は答を物語ってくれはしない。事実を知らなければならないのだ。事実を追求する事によって、この地の過去を知り、また、その世の中に関する人物のすばらしい一面を見、それによって、自分の欠点が見い出せるように思われたので、このテーマに関心を向けたのである。

II 研究方法

- (1)文献調査 文献を多く活用すると、ただ事実だけが簡単に出るだけなので、文献にはあまり頼らず、予想を基に、自力で事実を解明していこうと思う。
- (2)現地調査 建築物に刻まれた文字や、建築様式着眼し、それらから研究へと入っていこうと思う。

III 研究内容

1 今に至る根来寺の姿

現在手、根来寺は、和歌山県北部に一し、13棟の建築物から成る寺であり、紀の川を南に望み、景勝な地として親しまれ、国宝にまで指定されている地である。境内には、多くの建築物と共に、多くの墓地が存在している。

2 研究前の疑問

いざ現地へいってみると、多くの疑問にぶつかる。この根来寺、今は13棟の建築物しか残っていないが、昔は、87棟にまでのぼる数の建築物が存在していたようです。74棟もの建築物の減少は、大激戦と、関連しているにちがいません。一体、大激戦と多くの墓墓地には関係があるのだろうか。

3 事実解明のカギ

① 根来寺の中心「大塔」

根来寺の中心として、大塔という建築物がある。この建築物は、まだ再建されていないらしく、大変古い用式が見られました。そして、この建築物の看板には、「昔の戦乱を偲ばせるに足る鉄砲の弾痕が尚歴然として残っている」と書かれていました。おそらくこれは、大激戦と関係があるのでしょう。鉄砲伝来（1543年）から現在の間、大激戦は行われたのです。



凡 = 根来寺

▲図1 根来寺の位置



▲写真1 「大塔」

② 柱に刻まれた文字

大塔から数歩西へ行くと、「大伝法堂」という建築物につき当たる。この建築物の前には、いかにも古めしかそうな柱が1本立っているのです。そして、この柱には「南無興教大師」「新義真言宗」という文字が刻まれていたのです。調べた結果、興教大師という人物は、別名覚鑿上人といって、荒れ果てた高野山を、開拓した人だったようです。それが、反対に、高野山の僧達は二つに分裂し、争いをはじめ、上人の行動に不安を持ち、ついには上人に対し、クーデターを起こしたのです。それで上人は、この根来まで下山し、興教いわゆる真言宗を広め、この根来寺を建立したのでした。



▲写真2 大伝法堂

4 根来寺を支えた大荘園

① 根来寺に入った7荘園

根来寺が創立された頃(1140年)は、平安時代の後期、強い力を持った豪族や、寺社が、荘園の実権をにぎり、律令制度がくずれていった時代に当たります。創立者覚鑿上人は、高野山にいた時、朝廷と、友好的関係を結んでいました。そのためか、上人は、高野山にすでに7つもの荘園を持っていたのです。しかし、高野山の僧達は、それにも不満を持ち、対立し合うのでした。そこで現れたのが、頼頼と忠俊です、彼らはその7つの荘園を根来寺の寺籍と変え、あっさり高野山との対立をうち切ってしまったのでした。根来寺は和歌山に7つもの荘園を入れたのでした。



▲図2 根来寺の7荘園

② 恐るべき力を秘める根来寺

建立以来200年余りもの月日が過ぎました。北条氏の力も弱まり、次は足利氏が天下をとるか。と思われる時代に突入しました。その200年の間、鳥羽上皇から備前(岡山県)や近江(滋賀県)の荘園を寄進してもらったり、反対に、地頭などから荘園を取られたりはしましたが、根来寺は、なおも勢力を拡大していったようです。そして、この機会に足利尊氏から、和泉庄の荘園が寄進されたのでした。こうして、和歌山だけではなく、南河内から岸和田付近にまで、なんと72万石という恐るべき力を根来寺は秘めたのでした。

1石はおよそ米150kgを表す。72万石なら108,000tという重さになる。現在は、1ヶ月に1人あたり5kgくらいの米を消費するので、1年間72万石で、180万人もの人々に、1人1ヶ月5kgの米を与える事ができる。

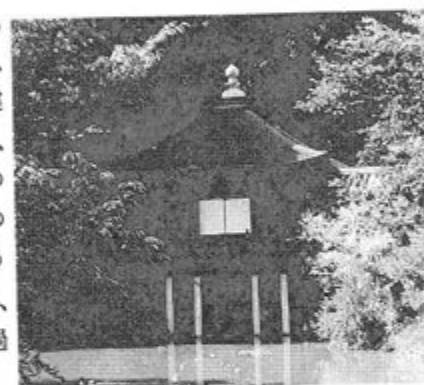
右図は、大名の力が大きくなった江戸時代の図で、50万石以上を持つ大名を表記してある。図で分かるように、日本全国でも、たった7人しか、このような力を持った大名はいない。図の中で、根来寺は、島津氏程度の力があつたのです。根来寺は、全国有数の強大な力を持ったのでした。室町時代でいうと、延暦寺(京都府)、石山本願寺(大阪)、そして根来寺(和歌山県)が、寺では、強大な力をほこっていたようです。どちらにしろこの根来寺、恐ろしい程強大な力を持っていた事が思われます。

- 伊達氏(仙台)
- 徳川氏(名古屋)
- 徳川氏(和歌山)
- 前田氏(金沢)
- 黒田氏(福岡)
- 細川氏(熊本)
- 島津氏(鹿児島)

▲図3 江戸時代の50万石以上の大名

③ 室町時代の面影

右の写真も根来寺の一角をなす寺の1つです。前で紹介した大塔や大伝法堂などとはちがひ、ゆったりとくつろげるような、風流さを持つ建築物です。見た所、京都の銀閣寺とよく似た、書院造り風に造られているようです。根来寺の安定が思われ、根来衆のくつろぎの場だったのでしよう。このように、ただ力を見せつけようというのではなく、日本の風流さを実現した、この建築物も、根来寺を支えた。といっても過言ではないでしょう。



▲写真3 風流な建築物

5 戦国時代

① 戦国時代と現在

戦国時代、それは、たった数名の欲が、多くの人々を殺し、とてもみにくいものだ。人間として失格で、人の情けというものを知らない人々のために、この時代の日本は、地獄と同様だ。とぼくたちは思ってしまう。しかし、なんとなく現在と比較してみると、多くの類似点がある事に気づく。一目見ると、大きな差がある。全然関係ないではないか。と疑念を持たれる方もいるかもしれませんが、ただ戦国時代に比べて、現在の方が、生活の安定感が著しくなっただけではないでしょうか。この「平等」ともいわれる現在でも、裏には多くの差別につながるもの(例えば右図の④)などが存在する。戦国時代は、一般には、人を殺すごとに地位が上がる。これは、人間のたった一つしかない「命」をうばうのだから、だんぜんいけない時代だ。と思われてしまう。もちろんこれは

比較	戦国時代	現在
① 人を表す単位	武力、身分	納税
② 高く評価されるには?	努力、権	努力
③ 高く評価されるもの	土地	金
④ 人それぞれの差	くらし、身分	給料、くらし、才能

▲図4 戦国時代、現在の比較

当然の事である。しかし、現在にも、気づかない所に、似たケースがある場合がある。例えば、受験者の平均点以上を採った者が合格するという学校に、AとBが受験するとして。Aは、すべて満点でBは、少々ミスがあった。平均点はBの採った点数より上で、Aだけが合格してしまった。これも、間接的ではあるが、Aが、Bを不合格の道へやった、という事は明らかである。つまり、戦国時代は、現在よりも、人と差をつけるためにする事が、スケールが大きく、また直接的である、という事が挙げられる。現在も戦国時代も、そうちがいはないのである。

② 戦国時代の導火線

歴史年表をながめると、戦国時代は、どうやったら応仁の乱あたりから始まっている事が分かる。応仁の乱とは1467年から細川氏と山名氏を中心に、11年間も京都で争った事を言う。この乱は山名・細川氏だけの、めごとだけではなく、例えば図の畠山政長と畠山義就は、後継ぎ争いで対立し合っている。

富樫政親		畠山義就		細川一族		武將		東軍
加賀	石	河内	河内	河内	河内	河内	河内	
畠山義就		畠山義就		山名一族		武將		西軍
能登	石川	大和	河内	河内	河内	河内	河内	

▲図5 応仁の乱で争った主な武將

ここで注目されたいのが、東軍の富樫政親である。彼は、図のとおり、加賀を支配する守護であった。しかも、応仁の乱が終わった年に、彼は、加賀の一向一揆で、権限を加賀の民衆らに奪われてしまったのであった。また、1485年起こったもので、畠山氏を追い出すという山城（現在の京都）の国一揆も起こっています。また、調べてみると他の多くの一揆も、この応仁の乱に参加した武將に対してのものが多かったです。つまり、山城の国一揆の成功から、多くの一揆が起こりはじめたのです。戦国時代はついに始まったのです。

③ 立ち上がる加賀民衆

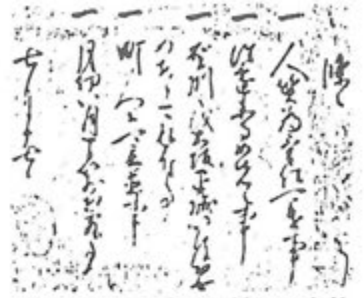
右のものは、民衆が、借金をなくす。という願いを、地藏に刻んだものです。このように、ものすごい苦しみの中、加賀に、蓮如という人が、一向宗（浄土真宗）を布教しに来たのでした。彼は、気強い人で、なかなか信者はでませんでした。が、守護、富樫政親に対する怒りや不満で、20万人の勢となったのです。これが、一向一揆を起こす第一の理由だったようです。この一向宗を布教した蓮如は、大谷本願寺(京都)、山科本願寺(京都)、石山本願寺(大坂)を建設した人だったので。石山本願寺とは、寺というよりも、戦のできる城のようなものだったようです。



▲図6 農民の苦しみを歌う地藏

④ 石山本願寺、信長からの書

戦国時代といえば、織田信長が有名である。彼は室町幕府を倒し、(1573年)天下をねらう実力者である。その信長は、本願寺とも密接な関係があった。しかし、幕府を倒すと、他の武將から圧力をかけられる。そこで少しでも力をつけようとした信長は、石山本願寺、明け渡しを申し出しました。



▲図7 本願寺明け渡しの条件

右のものは、その条件を書いた書です。本願寺は、実力者信長に力をかけられたのでした。1570年戦のひふたは切って落とされました。本願寺側には、同じ一向宗の加賀や、和歌山の雑賀(図1の☆)も加わりました。たがいに、ものすごい争いをしました。加賀などは、割とたやすく滅んだのですが、「紀州の海賊」とよばれるほどの雑賀、そして、それに加わった根来寺は、さすがになかなか降伏しませんでした。しかし、石山本願寺の敗北から、いったん降伏をしたのでした。

6 紀州の大激戦

① 目的を残した信長

1852年、織田信長はこの世を去った。長い天下統一の夢を残して、しかし、彼は、短い期間でありながらも天下統一を果たした。そして、大きな力を持ち、反抗する三つの寺(延暦寺、石山本願寺、根来寺)のうち、延暦寺、石山本願寺の2寺を滅亡させてしまったのである。彼は、ただ一つ、根来寺を滅ぼす前に、この世を絶ったのであった。

② 指命を受け継ぐ者

この信長の指命、そして天下統一の夢を継ぎ、信長のようなおそるべき力、野望を持ち、力をたくわえ続け、今まで信長の皇太子のような存在、戦国時代第2の実力者それは、豊臣秀吉、彼なのであった。信長のかたきを打った後、彼は、紀州征伐へと向かう、延暦寺→石山本願寺。次には……。と予想した根来寺も、雑賀衆と共に、戦の準備を行うのであった。

③ 根来寺最後の時

ドカーン。という鉄砲の響きと共に、大激戦のひふたは切って落とされた。根来衆2万人、雑賀衆1万人、そして10万人もの大軍を率いた秀吉軍。次々とあの2,000戸あまりもあった多くの建築物に、大きな炎が上がった。秀吉得意のやり方であった。両軍共に、鉄砲を使い、刀や槍を交わし合う。秀吉は、作戦を実行した。それは、寺の周りを兵で囲み、出てきた者を殺す。という事だった。中は次々に火がつき、逃げ場は薄れてくる。この作戦は、根来寺にして、てきめんだった。はじめは、少数の軍勢だったが、どんどん兵が根来寺に着いたのである。いくら武力のすぐれた者でも、数十人にかかると、ひとたまりもない。それに、建築物も多くが炎上している事だろうし、出ても死に違



▲図8 秀吉の作戦

いない。そのような思いが、根来衆にはめぐったのであった。その場で切腹する者、火に巻き込まれて死ぬ者、門外に出て戦死する者もいたようです。2万人もいるからといって、その中には体の弱い老人や、女や子供も含まれているのです。どうして皆殺しにできましょうか。秀吉のいる部隊は最終だったようですが、その最終部が到着する時点では、もう歯向かうものもいなければ、2棟（大伝法堂、大塔）を残し、すべて灰と化していたのでした。こうして、72万石という恐るべき力を秘めた根来寺も、力つき、紀州の大激戦は幕を閉じたのであった。根来寺は、それから数百年後、徳川頼宣という紀伊藩主の供養と再建があるまで、灰と死者の埋もれた死の地だったという。そして、根来寺は、今の美しい姿で、静かな静かな和歌山県の地に至っているのである。

IV 結論

ぼくは、聞いた「大激戦」というものの実体をつかむため、再建されていない建築物大塔、大伝法堂から1543年以後に大激戦は行われた事と興教大師との関連を知りました。興教大師と朝廷の密接な関係から、根来寺は、多くの荘園を寄進され、戦国時代には72万石にまで発展、その戦国時代の始まり、応仁の乱の参加人物と、その後の多くの一揆をかみ合わせ考えると、戦国時代という意味合いがなんとなく分かりました。その中で、大きい加賀の一向一揆を調べてみる事により、その一向宗の布教者蓮如は、大阪の石山本願寺を設立した事から、石山本願寺は一向宗を信仰している事が分かり、信長、石山本願寺の明けわたしの申し出によって起こった争いに、加賀、雑賀、そして根来寺、石山本願寺が、宗教の一致から組んだ事が分かりました。その結果、結局信長の勝利と終わったのですが、決して雑賀と根来寺は滅亡なく勢力を伸ばしたのでした。信長は、それから数年後、反抗する勢力の大きい寺（延暦寺、石山本願寺、根来寺）のうち、延暦寺と石山本願寺しか滅亡できないままこの世を去ったが、豊富秀吉が、その意志を継ぎ、紀州征伐へと目を向けた。それが求めていた「大激戦」のきっかけだったのである。大激戦のひふたは切って落とされた。秀吉軍10万人相手に根来衆も反抗したが、次々に放火され、まわりを囲まれ、とうとう72万石を秘めていた根来寺も、滅亡と終わったのである。研究後分かったのだが、始め出した「多くの墓と大激戦は関係あるのか」という疑問は、両者全く無関係で、墓は、この付近の人のものであった。

V 感想

この研究を実行し、今もなおめぐっているこの歴史は、すべてぼくたち1人1人の手で動かされ、必ずどこかでつながりがある。という事が分かりました。結局「大激戦」というほど長いものではなかったのですが、それは、ぼくにとって偉大でした。そして、この研究は、ぼくに、力強い心や夢を教えてくださいました。

VI 参考文献

・根来寺物語 芝村智豊 根来寺出版（1982年発行）